

## 高等教育機関における図書館評価 —「大学図書館の社会学」を構想する—

長谷川 哲也\* 内田 良\*\*

\*愛知教育大学 非常勤講師 \*\*学校教育講座

### Library Evaluation in Higher Education Institutions : Toward a Sociology of Academic Libraries

Tetsuya HASEGAWA\* Ryo UCHIDA\*\*

\*Part-time Lecturer of Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

\*\*Department of School Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

#### 要 約

高等教育研究と図書館研究において長らく続いてきた研究上の分断は、大学図書館の研究を自己完結的なものへと押しやってきた。「大学図書館の社会学」の構想は、大学図書館を大学あるいは社会全体のなかに位置づけること、また単純集計にとどまらない統計分析を用いることから、大学図書館の諸相を全体関連的に描出することを企図する。

本研究の主題「高等教育機関における図書館評価」は、「大学図書館を大学あるいは社会全体のなかに位置づけること」に重点を置きながら、大学図書館の評価について考察する。とくに「誰が評価するのか」という評価主体の視点から評価の力学を読み解き、評価の構造を体系的に整理していく。その整理からは、今日の認証評価制度のもとで、第一に、図書館界が先導してきた自己点検・評価の議論が一定の落ち着きをみせるなか、図書館評価が大学評価の一部としての性格を強めてきたこと、そして第二に、基礎的データに評価の関心が絞られ、さらにその限られたデータが大学本体の存続と関わって重大な意味をもつようになったことが見出された。

Keywords : 大学図書館、大学評価、図書館評価、認証評価

#### 1. 図書館界と高等教育研究

##### 1.1 「大学図書館は大学の心臓である」

図書館がもし知識の泉、思想の宝庫だと云うならば、大学における図書館の重要性は、言わずして既に明らかではないだろうか。一略一かつてプリンストン大学の開設大学図書館開館式においてギルマン総長は述べて曰く『大学図書館は大学の心臓である。もし心臓が虚弱であれば他のすべての機関の機能はにぶる。もし心臓が強かったら、澁刺として躍るであろう』と。まことに至言である。

『図書館記』(日本大学出版部編 1936 : 17-18)

「大学図書館は大学の心臓である」——大学図書館界において長らく語り継がれてきたこの成句には、大学の教育と研究において大学図書館のはたすべき役割が

示されている。

大学と図書館のそもそもの結びつきは中世ヨーロッパにはじまる。パリ大学の学寮 (collegium) に設置された図書館には、1289年には1,017冊の所蔵があったとされる(岩猿 1992、寺田・藤野 1994)。それから700年余りの時を経た今日、日本各地の大学には当たり前のように図書館が併設され、教育や研究の拠点となっている。

いっぽう、「大学図書館は大学の心臓である」という比喩は、今日の大学図書館の現実に合っていないという見方もある。心臓の比喩は、大学図書館の姿を反映しているというよりもむしろ、「それを伝聞または引用の形で引き合いに出し、対比することで、図書館の低迷を強調するという紋切り型のレトリックとして」用いられている。そして、ここにおいて図書館における心臓の隠喩は『死んだ』(山崎 1996: 255)とさえ言われる。

大学図書館は、心臓としてはたらしきをもっているのか否か。これは大学図書館のあり方を考えるにあたって避けて通ることのできない問いであり、本研究もまた例に漏れずその関心を共有している。くわえて本研究は、心臓の比喩からもう一つ別の視点を学びとりたいたいと考えている。心臓のような中心的役割をもっているかどうかにかかわらず、大学図書館を大学という機関のなかに位置づけて考察を進めようとする思考自体への関心である。

「大学図書館は大学の心臓である」というとき、ここでは「身体という全体があって、その中に一カ所機能的な中心が存在し—略—中心から全体に対して血液（資料）が送り出されるというイメージ」（山崎1996：255-256）が想定されている。「心臓の隠喩は『死んだ』」という場合、それは図書館が大学の中心としての機能をもちえなくなったことを示している。

中心であろうとなかろうと、いずれにしてもそこで所与とされていることがある。それは、図書館を大学の一組織としてみる視点である。図書館が中心=心臓であるかどうかはともかくも、つねに図書館は大学を構成する一組織=臓器として、大学という機関のなかに位置づけられ、そのはたらしきが論じられようとしているのである。ごく単純に、「大学図書館は大学を構成する一つの臓器である」と表現することができよう。このフレーズはとりたてて特別なことを主張しているわけではないが、しかしながら、はたしてこの思考は、今日の大学図書館に関する研究において十分に発揮されているのであろうか。

## 1. 2 研究の分断

中世ヨーロッパにはじまる、大学と図書館の長きにわたる結びつきを知るにつけ、今日の高等教育研究の盲点に気づかされる。すなわち、高等教育研究において「図書館」の研究がほとんど手つかずの状態なのである。

日本高等教育学会が発行する専門誌『高等教育研究』には、第1集（1998）から第13集（2010）に至るまで大学図書館をテーマとする論考は1本も見当たらない。また、高等教育研究者を多く擁している日本教育社会学会の専門誌『教育社会学研究』においても、第1集（1951）から第86集（2010）まで60年にわたる歴史のなかで大学図書館に関する論考は見つからない（それどころか図書館に関する論考さえもない）。大学教育学会の専門誌『大学教育学会誌』においても同様に、第1巻（1980）から第32巻（2010）<sup>1</sup>まで、大学図書館を冠する論考は出されていない。高等教育研究では、大学図書館は、心臓どころか臓器にさえ位置づけられていないといえる。

このように書くと、大学図書館の研究は皆無であるかのように思われるかもしれない。じつは大学図書館

の研究は、まったく別のところで蓄積されてきた。図書館が大学のなかですぐれて独立した地位と役割を与えられてきたことにあらわれているように、図書館の研究もまた高等教育関連の学会とは別の世界で進められてきた。その世界とは、「図書館界」である。「図書館界」は、「館界」とも略される、図書館組織全体を指す呼称である。全国規模の学術研究団体である日本図書館研究会からは、まさに『図書館界』という機関誌が隔月で発行されている。「図書館界」は呼び名として定着しているほどに、一つの確固たる位置づけをもっており、そのなかで独自に図書館研究が積み重ねられてきた。

図書館界では、先の機関誌『図書館界』をはじめとして、さまざまな雑誌が刊行されている。そしてじつは、大学図書館についても『大学図書館研究』（国公立大学図書館協力委員会・大学図書館編集委員会）という専門誌があり、大学図書館そのものに焦点を絞った研究が発表され蓄積されている。大学図書館の研究はおこなわれてこなかったのではなく、図書館界において自己完結的にこなわれてきたといえる。

「大学図書館は大学を構成する一つの臓器である」というものの、図書館と大学の結びつきは、少なくとも今日に関していうと、それは制度や組織を含めた実態上の結びつきではあっても、研究上では両者は分断されている。臓器の比喩を用いるならば、図書館という臓器を診る専門家はいても、その臓器が他の臓器とどう関わりながら動いているのかを診る専門家はいない——組織と組織の相互依存関係という社会学の世界では古典の域にある素朴に機能主義的な発想さえ、大学図書館に関する研究においては忘却されているのである。

## 2. 「大学図書館の社会学」を構想する

### 2. 1 研究対象のすれ違い

研究上の分断は、＜研究対象のすれ違い＞と言い換えてもよいだろう。高等教育研究は、大学を研究対象に据えるものの、ときに心臓とまで比喩される図書館について関心が低い。いっぽう図書館界は、大学図書館に注目するものそこから高等教育機関にまで視野を広げることが少ない。研究対象は、重なるようで重なっていない。

大学図書館の研究は、図書館界によって担われてきた。それが、大学図書館の研究を専門的・具体的・実践的方向へと導くかたちで、大学図書館の発展に寄与してきたことは、高く評価されるべきである。だがそれは他方で、大学図書館研究の関心を、ミクロな単位における実践上の課題へと、または大学図書館界全体が固有に抱える具体的な管理運営上の課題へと向かわせてきたといえる。

「マイクロな単位における実践上の課題」というのはつまり、個々の大学のさまざまな取り組みについて紹介や検証がなされることを指す。そして「大学図書館界全体が固有に抱える具体的な管理運営上の課題」というのは、図書の扱い（ILL、電子化）、図書館職員の地位・役割、図書館の評価といった、大学図書館界（あるいは図書館界）一般に共通する喫緊の課題を指す。これら2つの研究関心は、個々の大学図書館あるいは大学図書館界全体という相違はあるものの、いずれにしても大学図書館界内で消費される、自己完結的性質をもっている。〈研究対象のすれ違い〉は、大学図書館界の研究を自己完結的なものへと固定化し、研究上の分断をいっそう促進させる。大学図書館が大学の一組織であるからには、大学図書館という研究対象を、大学という大きな機関のなかに位置づける作業は重大な意味をもつはずである。

後に詳述することになる本研究の主題「高等教育機関における図書館評価」は、これまで重なるようでも重ならなかった研究対象の橋渡しを試みるものである。「大学図書館は大学を構成する一つの臓器である」ことを強く意識し、大学のなかに図書館を位置づけた分析を企図した大学図書館研究である。

## 2. 2 研究方法のすれ違い

今回の「高等教育機関における図書館評価」では深く追究することはないものの、図書館界と高等教育研究における研究上の分断がもたらしてきたもう一つのすれ違いを指摘しておきたい。それは、具体的な調査とその分析段階における〈研究方法のすれ違い〉である。

これまでの図書館界における大学図書館を対象とした調査研究には、主に以下の2つの方法がみられる。

第一が、前項の内容とも重なることで、マイクロな視点から個々の大学図書館の取り組みを、一つの事例として紹介または分析する方法である。当の大学図書館がどのような課題をもちそこにどのように対応しているのかについて、実践事例（質的データ）やあるいはそれにかかわる各指標の現況や達成度（量的データ）が提示される。

もちろん、個々のマイクロな単位を超えた、日本の大学図書館全体を見渡す作業がないというわけではない。それどころか、驚くほどの蓄積があると言ったほうがよいだろう。いわゆる「業務統計」（蔵書冊数や年間開館日数等の基礎的データ）を中心とした全国統計（詳細は第3節参照）であり、これが、大学図書館に特化された調査研究の第二の方法である。

この第二の方法には、大学図書館界を俯瞰する手がかりが多く含まれている。全国の大学図書館の業務統計が集約されることで、大学図書館界全体がどのような状況にあるのか、大きな見取り図を描くことができ

る。

ただし、今日手にとることができるその見取り図というのは、目がいまだ粗いものであるということを描きねばならない。全国統計の調査項目自体は細部にわたっているものの、その集約の仕方は基礎的なデータを測定および収集・編纂した「集計」（単純集計が中心）のレベルにとどまっている。細部にわたっているがゆえに、単純集計や基礎集計のレベルでも十分な情報量となり、ある程度の記述や説明が可能となってしまう。それが、より深い「分析」への誘因を閉ざしてきたことは否めない。業務統計などの全国統計をめぐっては、2変数（以上）を自由に組み合わせるさまざまな関係性を読み解くような統計的「分析」は、ほとんどなされていないのが現状である<sup>2</sup>。もちろん、研究や実践いずれにおいても、単純集計が重大な意味をもつ局面は多々ある。単純集計の意義を軽視してはならない。しかし、ただ集計表を作成したり眺めたりするだけではなく、一つの研究目的を設定して、「集計」よりも一歩進んだ「分析」にまで手を伸ばさなければ、新たな議論への扉は閉ざされたままとなる。

図書館界の手による業務統計の扱いが「集計」ととどまっている点は、高等教育研究が多様な変数を組み合わせ、ときに高度な統計手法を用いつつ、具体的課題に即した「分析」を進めてきた点と、まったく対照的である。長年にわたって蓄積されてきた大学図書館界全体の業務統計を、「集計」から「分析」へと移行させることで、多くの変数から成る業務統計が有効に活用されて、新たな知見が生まれてくることが期待できる。

## 2. 3 すれ違いを超えて

「大学図書館の社会学」を構想する——その狙いは、図書館界内の自己完結的な研究世界から、大学図書館をより広い研究の文脈へと位置づけなおすことにあ

る。大学を構成する一つの臓器であり、また教育と研究の拠点である大学図書館について、高等教育研究はあまりに関心であった。いっぽう、図書館界はその自立性ゆえに研究はしばしば自己完結的に遂行されるにとどまってきた。こうした研究上の分断は、そのまま〈研究対象のすれ違い〉として具現化し、また〈研究方法のすれ違い〉を生み出してきた。

これらのすれ違いは、大学図書館の研究にとってけっして有益な事態であるとはいえない。「大学図書館の社会学」の構想は、研究対象と研究方法のすれ違いを踏まえ、その溝を少しでも埋めるべく、具体的な研究指針を構想する。すなわち、大学図書館を大学あるいは社会全体のなかに位置づけること、また単純集計にとどまらない統計分析を用いることをとおして、大学図書館の諸相を全体関連的に描出することを企図

するのである。

## 2. 4 「高等教育機関における図書館評価」の研究目的

さて、本研究の主題「高等教育機関における図書館評価」は、上記「大学図書館の社会学」構想のなかでもとくに前者の「大学図書館を大学あるいは社会全体のなかに位置づけること」に重点を置くものである。以下、その趣旨を説明しておこう。

本主題「高等教育機関における図書館評価」の研究目的は、高等教育のなかに図書館を位置づけながら、大学図書館の評価におけるその方法、主体、指標などについて、その変遷を整理することである。これまでのところ大学図書館の研究をめぐって、図書館界と高等教育研究は<研究対象のすれ違い>の状態にある。本主題は、大学図書館そのものに焦点を絞るのではなく、高等教育機関としての大学図書館という位置づけを強く意識する。

大学図書館の社会学を構想するにあたって、大学図書館の「評価」に注目した理由は、「評価」というテーマからは、大学と大学図書館との今日的関係が鮮明に浮かびあがってくるからである。とりわけ今日の認証評価や市場型評価が先行する高等教育の領域において、大学図書館の評価は、図書館それ単体の評価で完結することはない。つねにそれは、大学全体の評価と絡んでいる。どのような変遷をたどってこうした関係性が生まれ、それはいま大学図書館のあり方にどのような影響をもたらしているのか。評価を軸にして、図書館と大学との関係の変遷をたどることで、今日大学図書館が直面している状況や困難とその背景にある評価をめぐる力学を、全体関連的に明らかにすることができると思われる。

大学図書館は、制度的・組織的にそして物理的にも、実態として大学のなかで確固たる位置、独立した位置に存してきた。しかしそうした位置がもっていることの意味は、評価の力学（とくに評価主体の変容）とともに大きく変化してくる。大学図書館の「位置づけ」を問うという作業は、すなわち、高等教育機関において大学図書館がどのような意味を与えられているのかという「意味づけ」を問う作業でもある。客観的実態そのものではなく、そこに付与される意味に着目するという点で、本主題が掲げる「評価」というテーマはすぐれて社会的問いかけを含んでいる。

(内田 良)

## 3. 大学図書館評価の変遷

### 3. 1 視点の提示

大学図書館を取り巻く環境の変化に伴い、大学図書館の評価に研究的な関心が集まっている。図書館評価という包括的な視点の中で公立図書館や専門図書館と

ともに大学図書館の評価を論じた永田（2008）や、大学図書館のマネジメントやサービスに関わる評価手法を中心に扱った佐藤（2005）、大学評価の一環としての大学図書館評価の仕組みを論じた蒲生（2007）などの研究は、大学図書館の評価が俯瞰的な視点でまとめられている<sup>3</sup>。加えて、各大学図書館の評価実践を事例的に紹介した研究も数多く蓄積されており（例えば、諏訪田ほか 2000、山田 2005、浅尾ほか 2009 など）、大学図書館の評価に関する研究は一定の厚みをもっている。

これらの研究では、評価の対象を「インプット」、「アウトプット」、「プロセス」、「アウトカム」と設定し、これらを単独あるいは複数用いて大学図書館をどのように評価するかということが論じられており、いわば対象として「何を評価するか」あるいは方法として「どのように評価するか」といった課題に対応するものといえる。とはいえ周知の通り、2004年からは認証評価機関による評価制度が始まっており、大学図書館を評価する主体も変化していると推察される。評価の対象や方法のみに焦点を当てるのではなく、「誰が評価するのか」という評価主体の視点から、何がどのように評価されるのかを論じることで、評価をめぐる力学にも迫ることができよう。そこで本節では、評価主体に注目しながら政策動向や先行研究の知見をまとめ、評価の構造を体系的に捉えなおした上で、評価が抱える矛盾や課題を浮かび上がらせる。

### 3. 2 データの測定および収集・編纂

大学図書館の評価ではこれまで、図書館サービスに投入される資源の量を表すインプットや、サービスの結果として算出された量を表すアウトプットが、大学図書館の日常業務の中で継続して測定されてきた。例えば各大学図書館では、所有する蔵書や利用状況、施設設備や経費に関するデータを定期的に測定し、必要に応じて利用あるいは公開している（糸賀 2001）。また、このような基礎的データを広範囲に収集して編纂した代表的な全国統計として、日本図書館協会が毎年刊行する『日本の図書館』と、文部科学省が毎年公表する『学術情報基盤実態調査結果報告』がある。前者の『日本の図書館』は、全国の公立図書館に加え、短大・高専を含む高等教育機関を網羅した調査結果を掲載し、1953年から刊行された。調査項目は、奉仕対象学生数、職員数、蔵書冊数、年間開館日数、決算額など多岐にわたり、大学図書館の本館・分館・分室レベルでの個票データが公開されている。一方、後者の『学術情報基盤実態調査結果報告（旧大学図書館実態調査結果報告）』は、全国の四年制大学の図書館及びコンピュータ・ネットワーク担当部門を対象とした悉皆調査を1966年から実施し、その結果を公表している。調査項目は、職員数、面積・閲覧座席数、蔵書冊

数、経費、ネットワークの状況など多岐にわたるものの、大学規模別に調査結果を公開しているため、各大学図書館の個票データを確認することはできない。

こうした基礎的データは、各大学図書館はもとより、各種機関が長年にわたり記録し続けており、わが国の大学図書館全体を評価する資料として貴重である。特に『日本の図書館』からは、各大学図書館の個票データの経年変化を観察することができるため、大学図書館を様々な観点から比較することが可能である。とはいえ、こうした貴重な資料が、大学図書館の評価および改善活動に十分活用されてきたのであろうか。毎年蓄積される資料が大学図書館の抜本的な改善へと結びつかず、単なる一般公開レベルにとどまっているとすれば、先に述べたようにこうした調査を「集計」から「分析」へと移行させる必要があろう<sup>4</sup>。

### 3. 3 自己点検・評価と評価手法の開発

大学図書館が本格的に評価と向き合うことになったのは、1991年に改正された大学設置基準に、自己点検・評価が努力義務として明記されたことの影響が大きい。大学に自己点検・評価が導入されたことで、その附属機関である大学図書館にも同様の評価が求められるようになる。この自己点検・評価は1999年の大学設置基準改正によって実施と結果の公表が義務化され、2004年施行の改正学校教育法に移行することで、法による規定となった。

法による規定となった自己点検・評価ではあるが、大学図書館に関する具体的な自己点検・評価の手法が確立していなかったため、国立大学図書館協議会や私立大学図書館協会といった関連協会から、自己点検・評価のガイドラインが発表されたことは注目に値する。これらのガイドラインでは、大学図書館の施設、運営、サービス等に対する点検・評価を行うため、インプットやアウトプットという、日常業務として測定されてきた統計資料を単に用いるのではなく、加工したり組み合わせたりすることで、評価指標として活用することが示されている。こうした基礎的データの加工や組み合わせによって、図書館の計画やサービスの達成度、有効性や効率を表現するプロセス指標の開発が試みられたのである（佐藤 2005）。特に、1999年に私立大学図書館協会が作成した『私立大学図書館自己点検評価手法ガイドライン』では、このプロセス指標を含めた「図書館パフォーマンス指標」（ISO11620）<sup>5</sup>が意識され、一部の項目で達成度測定<sup>6</sup>が提示された（四方田 2000）。この「図書館パフォーマンス指標」の第一義的な目的は「自己評価」であり、2002年にはJISによって日本でも規格化されたことから、大学図書館の自己点検・評価への積極的な導入が期待された。ところがこの「図書館パフォーマンス指標」は、先に述べたようなプロセス指標が複雑であることに加

え、図書館に所蔵されたタイトルを無作為抽出する調査なども含まれており、実施には相当な手間と時間を要することから、図書館評価において積極的には用いられていないことが指摘されている（桑原 2010）。

他方で2000年以降には、顧客への調査から「サービスの質」を評価する手法として、アメリカで発表された「SERVQUAL」<sup>7</sup>を用いて大学図書館の評価を試みる研究も行われてきた（永田ほか 2000、佐藤ほか 2003など）。「SERVQUAL」はあらゆるサービス産業に適用可能な評価手法を目指したが、これが図書館サービスを捉えきれていない可能性が指摘された。そのため、図書館サービスに適合するよう改良された手法が「LibQUAL +」<sup>8</sup>である。この「LibQUAL +」を用いた図書館サービス評価については、浅尾ほか（2009）が慶応義塾大学での事例を報告しているほか、大阪大学、金沢大学においても実施されている。こうした手法の他にも、図書館の諸活動が利用者にもたらした変化であるアウトカムを指標とすることで、大学図書館の「サービスの質」を評価しようとする事例研究も行われている。例えば戸田ほか（2007）は、文科大学の卒業生に対するアンケート調査を用いて、図書館の利用状況と図書館利用により得たものとの相互関係を検討している。また山田（2005）は、嘉悦大学1年生を対象としたアンケート調査を用いて、図書館ガイダンスや図書館ツアーといった図書館利用教育のアウトカムを測定している。「サービスの質」を問う一連の研究や調査は、様々な図書館サービスを顧客によって主観的に評価してその結果を集計している点で、日常業務として測定されてきた統計資料やパフォーマンス指標類による客観的な評価とは異なっている（糸賀 2001）。評価手法のこうした違いは、入手すべきデータの違いも同時に意味しており、「サービスの質」を問うための大規模な調査を実施するにはそれなりの負担が必要となる。永田（2005）も指摘するように、個々の研究レベルで調査を実施する場合にはその負担は想定済みではあるが、日常業務に追われる図書館現場で特別な調査を企画・実施することは、現実的に大きな困難を伴うだろう。

以上のように、大学図書館の自己点検・評価に関わる取り組みを概観すると、母体である大学の自己点検・評価の導入が重要な契機となったものの、具体的な手法に関する議論や調査研究を牽引したのは、各大学図書館やその関連協会、図書館研究者といった「図書館界」であった。そしてこれらの議論や調査研究に共通する主要な目的は、各大学図書館の改善に寄与するような評価手法の開発にあったことが窺われる。多様な「試み」を事例的に提示したことは、大学図書館個別の自己点検・評価をより実りある取り組みへと進化させた一方で、スタンダードとなりうる手法を研究者や関係協会が模索するという、個別と全体の両面から「図

書館界」が自己点検・評価の活動に活発であった様子が窺われる。

### 3. 4 大学評価の一環としての大学図書館評価

大学図書館はそれ自体が専門的な機関であるとともに、母体である大学の一部でもある。すなわち大学図書館を評価する場合、独立した専門的な機関という文脈からの評価と、母体大学に附属する一機関という文脈からの評価という、2つの評価が存在する。上述で概観した評価は主として前者の文脈であり<sup>9</sup>、以下では後者の文脈である大学評価の一環としての大学図書館評価を概観しよう。

先に述べたとおり、大学評価は1991年の大学設置基準改正による自己点検・評価の努力義務化、1999年の義務化という流れを辿りながらも、あくまで大学自らが点検・評価することが中心であった。ところが2004年に施行された認証評価制度では、国の認証を受けた認証評価機関が大学を評価するものであり、評価基準も認証評価機関が定めるものであった<sup>10</sup>。認証評価が導入された一つの意図は、大学設置基準という規制を緩和する代わりに、一定期間（大学は7年以内、専門職大学院は5年以内）ごとに認証評価機関が大学を評価することで、大学教育の質保証を「事前規制から事後チェックへ」移行させることであった。なお、大学を評価する認証評価機関としては、大学評価・学位授与機構、大学基準協会、日本高等教育評価機構、短期大学基準協会などがある。

それではこの認証評価のもとで、大学図書館はどのように評価されるのであろうか。例えば大学評価・学位授与機構の基準からみてみよう<sup>11</sup>。表1は同機構が評価を行う際の11の基準および、大学図書館に関わる「基準8」の内容を示している。この内容に沿って、表2のような根拠となる資料・データを例示した自己評価書の作成が求められる<sup>12</sup>。もちろん表2はあくまで同機構の例示であり、各大学の状況に応じて資料・データが準備されるが、基準8-2の評価の観点から、図書資料の収集と整備に重点を置いていることから、例示されている資料・データは、図書館が所有する諸資源の充実を測る指標であると理解される。その上で根拠となる資料・データの中身を見てみると、提出が義務付けられている「大学現況票」には、面積、閲覧座席数、開館時間、電子ジャーナルを含む蔵書数、視聴覚資料という項目で構成された、図書館の基本情報が評価指標として用いられており、その他の資料・データについても、日常業務として測定されてきた基礎的データの範囲が想定される<sup>13</sup>。

さらに、大学評価の一環としての大学図書館評価は、朝日新聞社の『大学ランキング』やリクルートの『カレッジ・マネジメント』とった、いわゆる市場型評価の中でも実施されている。例えば『大学ランキング』

表1 大学評価基準および「基準8」の内容

基準1	大学の目的
基準2	教育研究組織（実施体制）
基準3	教員及び教育支援者
基準4	学生の受入
基準5	教育内容及び方法
基準6	教育の成果
基準7	学生支援等
基準8	施設・設備
基準9	教育の質の向上及び改善のためのシステム
基準10	財務
基準11	管理運営
基準8	施設・設備
8-1	大学において編成された教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備が整備され、有効に活用されていること。
8-2	大学において編成された教育研究組織及び教育課程に応じて、図書館が整備されており、図書、学術雑誌、視聴覚資料その他の教育研究上必要な資料が系統的に収集、整理されていること。

大学評価・学位授与機構 HP より筆者作成

表2 「基準8」に関わる自己評価の根拠となる資料・データ等例

<ul style="list-style-type: none"> <li>・「大学現況票」別紙様式（提出必須）</li> <li>・図書館、図書資料等の整備方針</li> <li>・図書等の資料（電子ジャーナル、ソフトウェア、視聴覚教材等を含む。）の内容等のデータ、利用実績等が確認できる資料</li> <li>・図書館、図書資料等の利用に対する学生のニーズの具体的事例等</li> </ul>
---

大学評価・学位授与機構 HP より筆者作成

の2011年版では、全国の国公私立大学720校にアンケートを送付し、回答のあった680校分を集計した結果が掲載されている。集計項目は、奉仕対象学生1人あたりの蔵書冊数、受け入れ図書冊数、貸出数（学生）、図書館費について、それぞれの最高値を100として指数化されている。こうした指標に基づいて大学図書館が評価され、大学名がランキング形式で掲載される。一方『カレッジ・マネジメント』の89号では、260大学の大学4年生7万8000人を対象とした「大学教育改革の学生認知度調査」を実施し、1万6422人から回答を得ている。調査のうち図書館に関する項目は、「図書館が充実しており、各専門分野の資料や書籍が豊富である」と「閉館時間や貸出サービスなど図書館が利用しやすい」が設けられており、大学の設置者別、規模別、地域別、種別、設置年別に平均点が掲載されている。このような各出版社による市場型評価では、多数の大学を対象とした調査が行われ、図書館が所有する諸資源やサービスの充実を指標としている。

母体大学に附属する一機関という文脈から大学図書

館を評価する認証評価や市場型評価は、多数の大学を評価対象とするため、単純な指標を採用することが便宜上求められる。実際にこれらの評価で用いられた指標は、主観・客観の別はあるものの、図書館が所有する諸資源の充実を測るものであり、日常業務として測定されてきた基礎的データが根拠となるものも少なくない。確かに大規模な評価を行う際に、基礎的データを用いることの利便性は理解できるが、こうした指標は施設としての図書館の最低基準を測っているに過ぎず、母体大学そのものの質を評価するための大学図書館評価として適切かどうかについては、議論の余地があるだろう。

### 3. 5 評価主体と評価指標の変化

ここまでは大学図書館の評価について、①データの測定および収集・編纂、②自己点検・評価、③大学評価という側面から検討してきた。最後に、各評価の評価主体が、どのような評価指標を用いて大学図書館評価を行ってきたのかという、視点の変化をまとめる。

表3は、これまで検討してきた評価形態において、重要かつ主流となった評価主体と評価指標をまとめたものである。まずデータの測定および収集・編纂では、各大学図書館、日本図書館協会、文部科学省といった機関が、インプットやアウトプットなどの基礎的データを長年にわたり記録し続けてきた。こうした「集計」が貴重な資料として評価できる一方で、「集計」のみでも十分な情報量があるがゆえに、より深い「分析」への誘因を閉ざしてきたことも否めないだろう。次に自己点検・評価では、各大学図書館や関連協会、図書館研究者といった「図書館界」が、大学図書館の改善を目指すべく、プロセスやアウトカムなどの指標を用いて評価してきた。こうした評価指標が多様な評価の可能性を示した反面、指標の複雑さや、通常業務の中での特別な調査に対する負担といった、現実的な問題に直面することで、広く実用していくことは困難であった。そして、「図書館界」が自己点検・評価の活動に活発であった最中に登場したのが、大学評価としての認証評価制度である。この制度では、多数の大学を評価対象とするため、便宜上、基礎的データが大学

間に共通の評価指標として用いられることになった。

評価主体によって評価指標が以上のように変化してきたことは、大学図書館評価にどのようなインパクトを与えたのであろうか。第一に、認証評価制度の導入によって、大学評価の文脈から大学図書館を評価する色合いが強まっており、大学図書館が所有する諸資源が、母体大学を存続させるための最低基準を満たすよう求められている。母体大学の存続という強力なインセンティブを持った認証評価制度への対応が焦眉の課題となる中で、各大学図書館の改善を目指して「図書館界」が牽引してきた自己点検・評価に対するまなざしも変化しつつある。例えば図1は、大学図書館の自己評価報告書と自己評価に関する論文の発行点数の推移を表したものである<sup>14</sup>。これをみると、自己評価報告書と自己評価に関する論文の発行点数が、近年では横ばいから減少傾向にあることが窺われる。もちろんこうしたデータは目安の一つであり、自己点検・評価と認証評価が制度上「併存」していることを考えれば、自己点検・評価を充実させようとする動きは現在でも継続されているのだろう。とはいえ図1で示したように、自己点検・評価の議論が一定の落ち着きをみせているとすれば、その背景には、より強い関心が認証評価に注がれていることは否めないだろう<sup>15</sup>。これと関連して第二に、自己点検・評価の議論のもとで多様に存在した評価指標は、その複雑さや煩雑さゆえに広く実用していくことは難しく、近年では認証評価機関が設定した基礎的データに大きな価値が置かれるようになった。このことは、元来大学図書館が蓄積させてきた基礎的データに評価指標が「回帰」したのみならず、母体大学の存続を左右するものとして力を得たことを意味している。認証評価制度を契機としたこのような二つのインパクトは、大学図書館を母体大学の重要な

表3 主な大学図書館評価の変遷

評価形態	評価主体	評価指標
測定・収集・編纂 1950年代～	各大学図書館 日本図書館協会 文部科学省	基礎的データ（インプット・アウトプット）
自己点検・評価 1991年～	図書館界 （各大学図書館、 関連協会、図書館研究者）	図書館パフォーマンス指標（プロセス） SERVQUAL、LibQUAL+ アウトカム指標
認証評価 2004年～	認証評価機関	基礎的データ（インプット・アウトプット）

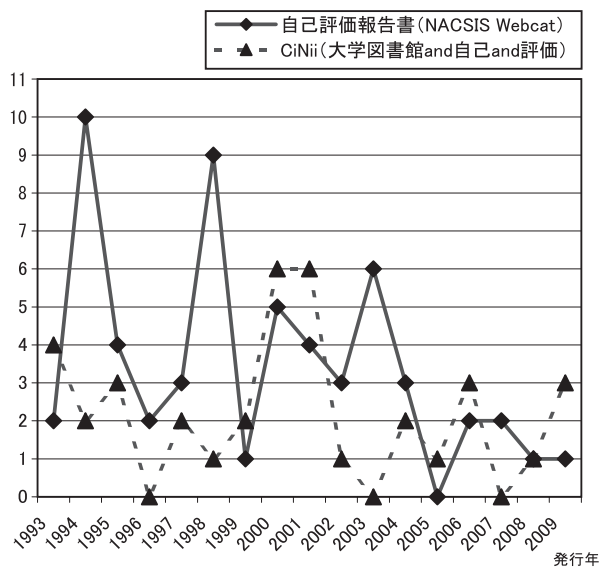


図1 自己評価報告書と自己評価に関する論文の発行点数の推移

一機関として位置づけつつも、これまでのように互いが無関係ではいられなくなったことを意識づけるものであった。

(長谷川 哲也)

#### 4. 結語

図書館界が先導してきた自己点検・評価の議論が一定の落ち着きをみせるなか、今日では認証評価・市場型評価により強い関心が寄せられている。大学図書館はいま、大学間に広く共通するような基礎的データを中心にして、認証評価機関や高等教育機関、または市場からのまなざしに対応しなければならなくなっている。

1990年代から2000年代前半まで、「パフォーマンス指標」や「LibQUAL+」といった、図書館界の手による高度な自己点検・評価への気運が高まった。そこからすると、評価主体が認証評価機関へと移った2000年代後半における、評価指標の基礎的データへの回帰は、図書館評価の方法が成熟を目前に足踏み状態にあるとみることができよう。あるいは、毎年集計されてきた種々のデータが、ようやく厳選されて適切に用いられるようになったのだと前向きに受け止めることもできよう。

ただここで私たちが見落としてはならないのは、その流れのなかで、単純集計が示す基礎的データの数値が、絶対的な評価指標として強力な意味をもってしまうことである。認証評価や市場型評価は、限られた基礎的データを抽出し、その数値に熱いまなざしを注ぐ。

単にデータが測定され収集・編纂されていた時代には、基礎的データがただ毎年積み重ねられていた。次の自己点検・評価の時代、図書館界は高度で専門的な新たな指標づくりに着手しようとした。しかしその後台頭する認証評価では、認証評価機関が基礎的データを再び引き出し、その数値に大きな価値を置いた。評価指標がかつての測定・収集・編纂の時代の基礎的データに「回帰」したとはいうものの、それは第一に、基礎的データに大きな価値が付与されながらの回帰であり、そして第二に、認証評価機関という図書館界とは別の評価主体の影響下のもとでの回帰である。そしてこれらの回帰は、わかりやすい指標で競争を繰り広げようとする市場型評価と絡みながら、いっそう促進されている。

業務統計をみるとわかるように、大学図書館を語るには蔵書冊数や開館日数、奉仕対象者数、職員数といった基本的な項目だけでなくILL（相互貸借）件数や資料費、貸出条件（冊数、期間）など、じつにさまざまな変数＝視点がある。そして、そこにはさまざまな変数の組み合わせの可能性、すなわち「分析」の可能性が潜在している。基礎的データの単純な数値を絶対視

しようとする評価のあり方は、「分析」への展望を閉ざしてしまう。

何かについて語るということは、別の何かについて語らないということである。大学図書館を語る多種多様な視点のなかで、ある限られた視点に関心が固定化されるということは、別の変数に対する関心を失うということでもある。図書館内のさまざまな変数が、図書館や大学のあり方にどのような関わりをもっているのか。そうした幅広い視野から大学図書館を研究の対象としなければ、大学図書館という臓器はその大部分が機能不全を起こしてしまうであろう。「大学図書館の社会学」には、大学図書館の今日を、幅広い視野のもとで相対化していく力が求められる。

(内田 良)

#### 注

- 1 第1巻第1号(1980)から第19巻第1号(1997)までは、『一般教育学会誌』(一般教育学会)という名で刊行されてきた。
- 2 後述する「パフォーマンス評価」では、複雑な「分析」を前提とするものであるが、これは個々の大学図書館におけるミクロな単位での調査研究であって、マクロな見取り図を描き出そうとするものではない。
- 3 中でも永田(2008)や佐藤(2005)では、海外の図書館評価の動向が詳述されている。
- 4 『大学図書館実態調査結果報告』に掲載されている国立大学図書館の資料費のデータと、東京大学の学部図書館の資料費のデータを用いて、両者を比較検討している貴重な研究として、星野(2009)がある。
- 5 「図書館パフォーマンス指標」とは、何らかの業務統計の組み合わせや調査統計によるデータの収集・加工にもとづいて指標化されている。具体的な指標は糸賀(2001)を参照。
- 6 四方田(2000)によれば、達成度測定とは、図書館統計に代表されるインプットとアウトプットを、そのまま生の数値として列挙、比較するのではなく、それぞれの組み合わせとして対比、計数化し、それを図書館システムの達成された実績値として表そうとするものである。
- 7 逸村(2005)によれば、「SERVQUAL」とは顧客の主観に基づくサービス品質概念を測定可能な形式に定義し、具体化したもの。なお、具体的な開発過程や項目については、須賀(2003)や佐藤(2005)が詳しい。
- 8 「LibQUAL+」の具体的な開発過程や項目については、佐藤(2004)を参照。
- 9 上述でとりあげた自己点検・評価は大学評価の一環として導入された制度ではあるが、大学図書館の自己点検・評価に関する議論や調査研究を牽引したのが「図書館界」であることは、先に示した通りである。
- 10 学校教育法第109条を参照。
- 11 この他にも、森(2005)は大学基準協会の評価基準を、塩見(2007)は大学基準協会と日本高等教育評価機構の評価基準を、それぞれ分析している。
- 12 大学評価・学位授与機構では「基準5」の自己評価書作成にあたって、図書館の利用時間の延長などに関する資料・データを例示している。
- 13 大学基準協会による認証評価の事例を付記すれば、2009年



- 度に行われた LEC 会計大学院に対する認証評価では同大学院が基準に適合していないと判定され、その一因として、図書等の整備に重大な問題があると指摘されている。認証評価制度のもとでは、図書館が所有する諸資源の充実を指標として、最低基準を満たしているか否かが評価の中心であると推察される。
- 14 各大学図書館の自己評価報告書については、NACSIS Webcat のフリーワード検索を利用した。また自己評価に関する論文については、国立情報学研究所の論文情報ナビゲータである CiNii を利用し、「大学図書館 and 自己 and 評価」というキーワードで検索した。なお、検索でヒットした中でも、明らかに大学図書館の自己評価と関わりのないものは除外してある。
- 15 各大学図書館の自己評価報告書と外部調査報告書の発行点数を調べた蒲生 (2007) でも、近年では報告書の発行点数が減少していることを示しており、その要因として、認証評価への対応により、全学的な評価活動へとシフトしていることが指摘されている。

## 参 考 文 献

- 浅尾千夏子・杉野珠梨亜・藤本優子、2009、「慶応義塾大学における LibQUAL +」『MediaNet』No.16, pp.7-11.
- 大学評価・学位授与機構、「自己評価実施要項 大学機関別認証評価付 選択的評価事項 (平成 23 年度実施分)」([http://www.niad.ac.jp/ICSFiles/afieldfile/2010/06/21/no6\\_1\\_1\\_daigakujikohyouka23.pdf](http://www.niad.ac.jp/ICSFiles/afieldfile/2010/06/21/no6_1_1_daigakujikohyouka23.pdf), 最終アクセス日: 2010 年 10 月 13 日)。
- 大学基準協会、「2009 (平成 21) 年度『経営系専門職大学院認証評価』の結果について (LEC 東京リーガルマインド大学大学院高度専門職研究科会計専門職専攻)」([http://www.juaa.or.jp/images/accreditation/pdf/result/management/2009/accounting\\_lec.pdf](http://www.juaa.or.jp/images/accreditation/pdf/result/management/2009/accounting_lec.pdf), 最終アクセス日: 2010 年 10 月 13 日)。
- 藤島隆、2003、「図書館は大学の心臓となりうるか?」『徳島大学附属図書館報』No. 66, pp. 6-7.
- 蒲生英博、2007、「評価がいっぱい——大学図書館と評価の仕組み」『現代の図書館』Vol.45, No.2, pp.99-105.
- 星野雅英、2009、「国立大学図書館における資料費の推移——大学図書館実態調査結果報告から」『大学図書館研究』第 86 号, pp.92-104.
- 糸賀雅児、2001、「総論——図書館の統計と評価」『情報の科学と技術』51 巻 6 号, pp.312-317.
- 逸村裕、2005、「大学図書館の運営」日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会編『図書館ハンドブック』日本図書館協会, pp.150-161.
- 岩猿敏生、1992、「大学図書館とは何か」岩猿敏生・大城善盛・浅野次郎『大学図書館の管理と運営』日本図書館協会。
- 国立大学図書館協議会、1993、「国立大学における自己点検・評価について よりよき実施向けの提言」『大学図書館研究』第 42 号, pp.77-92.
- 桑原芳哉、2010、「図書館評価」『図書館界』Vol.61, No.5, pp.427-436.
- 森茜、2005、「第三者評価が大学図書館に求めるもの——認証評価は大学図書館改革のメルクマールになり得るか」『図書館雑誌』Vol.99, No.11, pp.770-773.
- 永田治樹・藤井美咲・北村明久、2000、「SERVQUAL による図書館サービスの品質評価」『大学図書館研究』第 59 号, pp.1-15.
- 永田治樹、2003、「大学図書館の経営計画と『顧客評価』」日本図書館情報学会研究委員会編『図書館の経営評価——パフォーマンス指標による新たな図書館評価の可能性』勉誠出版, pp.29-47.
- 、2005、「大学評価と図書館評価」『情報の科学と技術』55 巻 12 号, pp.541-545.
- 、2008、「図書館評価の枠組みと課題」『図書館界』Vol.60, No.4, pp.266-279.
- 日本大学出版部編、1936、『図書館記』日本大学出版部。
- 日本リクルートセンター編、1998、『大学・短期大学・専修学校のためのカレッジ・マネジメント』89 号。
- 佐藤義則・永田治樹、2003、「図書館サービスの品質測定について——SERVQUAL の問題を中心に」『日本図書館情報学会誌』Vol.49, No.1, pp.1-14.
- 佐藤義則、2004、「LibQUAL + の展開と図書館サービスの品質評価」『カレントアウェアネス』No.280, pp.9-12.
- 、2005、「大学図書館の評価」逸村裕・竹内比呂也編『変わりゆく大学図書館』勁草書房, pp.191-208.
- 塩見橋子、2007、「認証評価制度における大学図書館の自己点検評価」『Journal of Informatics』Vol.4, No.1 (<http://ojs.info.gsucc.osaka-cu.ac.jp/JI/include/getdoc.php?id=172&article=52&mode=pdf>, 最終アクセス日: 2010 年 10 月 13 日)。
- 私立大学図書館協会自己点検・評価手法ガイドライン作成委員会編、1999、『私立大学図書館自己点検・評価手法ガイドライン』私立大学図書館協会。
- 須賀千絵、2003、「サービスの質を評価する方法: 図書館への SERVQUAL の適用」日本図書館情報学会研究委員会編『図書館の経営評価——パフォーマンス指標による新たな図書館評価の可能性』勉誠出版, pp.65-84.
- 諏訪田義美・弘瀬高久・村上喜廣・中齋二三博・上口正昭、2000、「岐阜大学附属図書館の自己評価」『現代の図書館』Vol.38, No.1, pp.4-9.
- 週刊朝日編、2011、『大学ランキング』朝日新聞社。
- 寺田光孝・藤野幸雄、1994、『図書館の歴史』日外教養選書。
- 戸田あきら・永田治樹、2007、「学生の図書館利用と学習成果——大学図書館におけるアウトカム評価に関する研究」『日本図書館情報学会誌』Vol.53, No.1, pp.17-34.
- 山田かおり、2005、「図書館利用教育の評価——嘉悦大学 1 年生を対象としたアウトカム測定の試み」『大学図書館研究』第 73 号, pp.15-24.
- 山崎賢二、1996、「図書館の隠喩としての『心臓』」『医学図書館』Vol. 43, No. 2, pp. 252-256.
- 四方田均、2000、「大学図書館の自己点検・評価手法の問題——私立大学図書館のガイドライン作成をふりかえって」『専門図書館』No.182, pp.6-12.